国際基督教大学（ICU） 教養学部

訪問調査対象プログラム名	ソフォモア SEA プログラム
類　　型	語学習得型・専門履修型・教養履修型×選択型

Ａ．海外プログラムの詳細

【要旨】

- 2 年次夏期休暇を利用した 6 週間のプログラムで、ヴィクトリア大学（カナダ）、ワシントン大学（アメリカ）およびウィスコンシン大学ミルウォーキー校（アメリカ）の 3 つの派遣先大学でそれぞれ実施される（2018 年度）。
- 本プログラムは ICU のカリキュラム全体との関連性が非常に高く、特に 1・2 年次のカリキュラムのコアとなるリベラルアーツ英語プログラム（ELA）の一部を担っている。
- 本プログラムの履修により、リサーチ・ペーパー執筆に取り組む 2 年次必修科目「Research Writing」の単位を与えられるが、その理由は、英語圏という異文化環境の中で、英語を学ぶと同時にリサーチにも取り組むということに意義を見出しているからである。

１．教育活動、教育支援、アセスメントと対応した教育目標設定

全学，学部あるいは学科での DP あるいは教育目標との対応関係が明確である

ICU は 1953 年建学以来、日本のリベラルアーツ・カレッジの草分けとして独自のポジションを占めている。

ICU では、4 年間の学修を通じて学生の Writing 能力の向上に力を入れている。学生には、リベラルアーツを学んで、そこでインプットした知識や考え方を日英両言語で書くことを中心として発信できるようになってもらいたいと考えている。近年の学生は高校までの教育の中で書くことには慣れていない。そこで、ICU では、1 年次ではアカデミック・スキル（パラグラフの理解や論証の仕方を身につけるなど）を、2 年次では Research Writing のスキルをそれぞれ身につけ、その上で 3 年次では深く専門（リベラルアーツ）を学修し、4 年次で卒業論文を書けるようになるという流れでカリキュラムを構成している。本プログラムへの参加で単位が与えられる必修科目「Research Writing」は、こうした ICU の 1・2 年次のカリキュラムの核をなすリベラルアーツ英語プログラム（ELA）の集大成として、アカデミックな英語力と批判的思考力が試される重要な科目として位置付けられている。

ICU が「Research Writing」を本海外プログラムの履修により達成できるようにした理由は、英語圏という異文化環境の中で、英語を学ぶと同時にリサーチにも取り組むということに意義を見出しているからである。この意義こそが ICU がディプロマポリシーに掲げて学生に身につけさせたいと考えている能力を涵養することである。ICU のディプロマポリ

シーは以下のとおりである。本プログラムに関わるのは、以下のうち 1、2、3、5 である。

【ディプロマポリシー】

1. 学問の基礎を固め、自発的学修者として主体的に計画を立てつつ、創造的に学んでいく能力
2. 日英両語で学び、世界の人々と対話できる言語運用能力
3. 自他に対する批判的思考力を基礎に、問題を発見し解決していく能力
4. 文理を問わず多様な知識を統合し、実践の場で活用する能力
5. 効果的な文章記述力とコミュニケーション力に基づく説明能力

２．海外プログラムの実施状況とその内容

専門にかかわる主目的のプログラムに加え，現地の学生や人々とのコミュニケーションにかかわるプログラムが明示されている

【実施時期】2 年次夏期休暇

【実施期間】6 週間

【実施場所】ヴィクトリア大学（カナダ）、ワシントン大学（アメリカ）およびウィスコンシン大学ミルウォーキー校（アメリカ）

【参加学生数】

大　　学	国	2017 年度	2018 年度
ヴィクトリア大学	カナダ	10 人	12 人
ワシントン大学	アメリカ	10 人	12 人
ウィスコンシン大学ミルウォーキー校 エセックス大学	アメリカ イギリス	10 人 10 人	12 人 協定終了
合計		40 人	36 人

※2018 年度の定員は 2017 年度同様 40 名である。

【プログラムの具体的活動内容】

本プログラムは、「Research Writing」3 単位と選択科目「Overseas Research Writing」1 単位に相当する英語科目を履修する英語研修プログラムである（2018 年度時点）。ICU 生向けに開発された独自カリキュラム「Research Writing」を学修するほか、他国から参加している学生とともにスピーキングとリスニングの学修を主とした英語研修プログラムにも参加する内容となっている。

本プログラムの募集対象は、1 年次の海外プログラム「フレッシュマン SEA プログラム」に参加しなかった 2 年生である。1 学年約 600 人中、約 200 人がこの「フレッシュマン SEA プログラム」に参加している。募集対象をこのようにしているのは、ICU では海外経験をしたことのない学生に本プログラムに参加してもらいたいと考えているからである。本プログラムの募集にあたっての応募条件は、成績については GPA2.0 以上（2.5 以上が望ましい）、英語能力については TOEFL（ITP）500 以上もしくは IELTS5.5 以上である。

本プログラムの定員は、派遣先 3 大学合わせて 40 名と「フレッシュマン SEA プログラム」に比して小規模である。その理由は、派遣先大学に ICU で開講される Research Writing のシラバスを踏まえた授業・カリキュラムを提供してもらっているからであり、このことは定員規模が小さいとはいえ派遣先大学にとっての負荷も大きいからである。なお派遣先大学に、こうした独自のカリキュラムで授業を提供してもらっている海外プログラムは、本プログラムだけである。

本プログラムの学修目標は 3 つの大学のどの派遣先であっても同じであるが、プログラムの内容は大学によって異なる。ICU より提供された 2018 年度の資料とインタビューに基づき、以下にそれぞれの内容を説明する。

【ヴィクトリア大学（カナダ、略称：UVic）】

<table>
<tr><td>Week1</td><td>Week2</td><td>Week3</td><td>Week4</td><td>Week5</td><td>Week6</td></tr>
<tr><td colspan="6">Research Writing</td></tr>
<tr><td colspan="4">Program 4</td><td colspan="2"></td></tr>
</table>

UVic の English Language Centre で行われる本プログラムは、最初の 4 週間は「Program4」と呼ばれる「English Language Summer Program」に参加する。「Program 4」は、世界各国から学生が集まる夏期プログラムで、午前中の授業（8:30-12:30）に加え、午後と夕食後には様々なアクティビティ（例：スポーツや、各国の学生がダンスや歌などを披露する Culture Night）が用意されている。また、これと並行して週 2 回午後に「Research Writing」の授業が行われる（14:00-16:00）。

残りの 2 週間は、ICU 生のみで Research Paper を仕上げる。UVic の「Research Writing」では、原則としてはカナダにまつわるテーマを選び、現地到着直後第 1 週目に Proposal を提出するため、事前の準備が求められる。4 週目に Outline、「Program 4」終了後の 5 週目に第 1 稿、最終週に第 2 稿と最終稿を提出する。

【ワシントン大学（アメリカ、略称：WSU）】

<table>
<tr><td>Week1</td><td>Week2</td><td>Week3</td><td>Week4</td><td>Week5</td><td colspan="2">Week6</td></tr>
<tr><td colspan="5">Academic (Research) Writing</td><td colspan="2" rowspan="4">Seattle
Trip
水−土</td></tr>
<tr><td colspan="2">Oral Skills</td><td colspan="3"></td></tr>
<tr><td colspan="3">American Studies 216</td><td colspan="2"></td></tr>
<tr><td colspan="3">SI (Support for AW)
Sheltered Instruction (Support for American Studies)</td><td>SI</td><td>SI
月・火</td></tr>
</table>

サマーセッションの一環として WSU の正規学部生向けに開講されている「American Studies 216」という授業を WSU の学生と一緒に受けられることが特長である。WSU は、正規学部生レベルの授業を受講できる唯一の研修校である。1-4 週目の 4 週間、「American Studies 216」の授業を毎日 2 時間ずつとその補習授業（「Sheltered Instruction」、ICU 生

のみ、週 6 時間）を受講し、様々な社会問題や米国の文化と絡めて学ぶ。今日の文化的なテーマを多く取り扱う授業である。「American Studies 216」が行われない期間の補習授業は、「Academic Writing (Research Writing)」の補習となる。

ICU 生のみを対象とした「Academic Writing (=Research Writing)」は、6 週間継続して週 6 時間ずつ行われる。Research Writing は、「American Studies 216」で学ぶ内容に関連したトピックを選択して取り組む。これらに加えて、前半 3 週間は週 3 時間、WSU の Intensive American Language Center (IALC) の英語学習者と共に学ぶ機会もある（「Oral Skills」）。

【ウィスコンシン大学ミルォーキー校（アメリカ、略称：UWM）】

Week1	Week2	Week3	Week4	Week5	Week6
Research Writing（RW）					
Intensive English Writing（IEP）					

English as a Second Language (ESL)プログラムで、1 日あたり「Intensive English Program (IEP)」を 3 コマ（75 分×3 コマ）と ICU 生のみの Research Writing（RW）を 120 分受講する。IEP は水曜日を除く月曜日から金曜日まで 1 日あたり 4 コマのコアクラス（①Reading and Vocabulary、②Speaking and Listening、③Writing and Grammar、④Elective 1/2）から構成されているが、ICU 生は①、②、④を受講し、③の時間には Research Writing に取り組む。水曜日はフィールドトリップを行う。IEP の内容は、CEFR (Common European Framework of Reference for Language) をベースにしている。到着後にオンラインで受検するプレースメントテストの結果によって、A1、A2、B1、B 2 のうちのいずれかのクラスに配属され、様々な国から集まってくる学生と共に英語力を強化する、例えば A1 は、日常の簡単な表現を理解して、基本的なやりとりができる、B2 は、社会生活上の幅広い話題を理解して、自然な会話ができるレベルを指す。

毎日 120 分 RW が行われるが、RW のテーマは特に限定されない。1～3 週目で丁寧にリサーチをし、4 週目の最後に第 1 稿、5 週目の最後に第 2 稿、最終日に最終稿を提出する。

３．事前・事後学習およびカリキュラム全体との関連

全学・学部・学科のカリキュラムと連携している（事前・事後両方に関連科目がある）

現地での学修や生活に関連する何らかの事前学習コンテンツが用意されている

現地での学修に関連する事後学習のコンテンツが用意されている（全員が 2 項目以上こなす）

本プログラムでの事前学習は、実質的にはプログラム応募の時点から始まっている。参加を希望する学生は、面接で「Research Writing（RW）」で書こうと考えているテーマや内容の構想を面接者に説明する必要がある（1 年次の 12 月）。参加を希望する学生は、ここで説

明するテーマや内容、構想、それへの関心について、あらかじめ下調べなどをして準備をした上で面接者に説明し、加えて希望する派遣先に順番をつける。面接者は学生の執筆テーマや関心について質問し、希望者それぞれの適性に応じて派遣先大学を確定させている。例えば RW で執筆するテーマが移民であれば、3 大学どの大学でも移民についての調査はできるのでどの大学も派遣可であるし、カナダの先住民族をテーマにしたいというのであれば、カナダにあるヴィクトリア大学が適しているなどと、テーマや希望者の特性を考慮しながら派遣先大学を決定させていく。こうした希望者と派遣先大学のマッチングができるよう、面接を行う教職員は派遣先 3 大学それぞれの特徴やサポート体制などを熟知している。派遣先大学の確定後、オリエンテーションは複数回開催され、RW 完成までのプロセスの提示、RW の執筆の進め方の指導、参考になる書籍の紹介、RW の研究プロポーザル作成の指導などを行なっている。

事後学習としては、参加報告書（A4 1 枚以上、日英いずれの言語でも良い）の作成とその提出、フォローアップミーティングでの本プログラム参加の振り返りと今後のプログラムの進め方について話し合い、派遣先大学と調整する。

本プログラムは ICU のカリキュラム全体との関連性が非常に高く、特に 1・2 年次のカリキュラムのコアとなるリベラルアーツ英語プログラム（ELA）の一部を担っている。

ICU 生は、入学時に英語のプレースメントテストと海外経験などの情報をもとにストリーム 1～4 に分類され、それぞれの英語運用能力に適した授業が提供されるが、ここでは最も人数の多いストリーム 3 を例にして ELA について説明する。

日本語を母語とする 1・2 年次の学生は、英語教育プログラムであるリベラルアーツ英語プログラム（ELA: English for Liberal Arts Program）を履修することになっている。ELA は、特に 3 年次以降の英語によるリベラルアーツ教育を受講できるだけのアカデミックな英語力と批判的思考力の育成を目的としたプログラムで、4 年間の本大学における学びの基礎固めとして位置付けられるプログラムである。

ストリーム 3 の 1 年次の場合、春・秋学期は週 9 コマ、冬学期は週 8 コマの英語科目を履修し、その中心となるのが ARW（Academic Reading & Writing、読解と論文作法）と RCA（Reading & Content Analysis、精読と英文構成法）の 2 つのコア科目である。この 2 科目では「異文化コミュニケーション」や「生命倫理」などの共通のテーマに関する、論文などの文献を英語で読み、その内容について英語でのディスカッションやプレゼンテーションを行い、他の学生や教員の意見も聞くことで、現代の様々な問題（例、生命倫理なら「安楽死」など）について多様な視点から考察する批判的思考力を育成することを目指している。また自分の考えを英文エッセイにまとめる練習もする。

なお 1 年次夏期休暇には「フレッシュマン SEA プログラム」という海外プログラムがある。これは 1 年次春学期の ELA の延長上に位置づけられており、春学期の授業全体を事前学習のように位置付け、ここでの学修を秋学期以降の ELA での学修に繋げるような英語研修プログラムである。ICU というと帰国生が多いというイメージが強いが、実際にはこの

「フレッシュマン SEA プログラム」で初めて海外体験をする学生も多い。「異文化で、自分で問題を解決する力を養う」という考えの下に引率の教職員はつかず、ホームステイ先で起こる異文化コミュニケーションのトラブルも、まずは自分で解決方法を探る、クラスの英語力レベルが自分の希望と異なっていれば、それも自力で交渉する、などの考えで運用されている。「フレッシュマン SEA プログラム」は、ELA の一環として位置づけられており、ELA の単位として認定されている。

2 年次の ELA 科目である RW では、1,500-2,000words のリサーチ・ペーパーを執筆する。RW は、1 年次の ELA で培った英語運用能力と批判的思考能力を活用し、必修の卒業論文執筆に必要な知識・スキルのさらなる育成を目標とする重要な必修科目である。本プログラムは、RW を海外プログラムの英語環境の中で、通常の科目 RW のシラバスを踏まえた内容で実施されている。このことから本プログラムはカリキュラムとの関連性が非常に高いと言える。

なお夏期休暇に実施される本プログラムを終え秋学期に入ると、2 年次の終わりに専攻を選択することになるので、それに向けて、リサーチ・ペーパーの執筆で学修したことを活かして関心のある専門科目を履修する。英語で実施される専門科目もあり、帰国後早速そうした科目を履修する学生も多い。履修する科目の選択にあたっては、アカデミックアドバイザーの教員もアドバイスを与える。

このような、ICU の海外プログラムを含むカリキュラム全体像を示すと以下のようになる。

英語習熟度別でストリーム３の学生の場合

<table>
<tr><th rowspan="2">学期
教育内容</th><th colspan="3">１年次</th><th colspan="3">２年次</th><th colspan="3">３年次</th><th colspan="3">４年次</th></tr>
<tr><th>春学期</th><th>秋学期</th><th>冬学期</th><th>春学期</th><th>秋学期</th><th>冬学期</th><th>春学期</th><th>秋学期</th><th>冬学期</th><th>春学期</th><th>秋学期</th><th>冬学期</th></tr>
<tr><td>異文化対応力育成</td><td colspan="12">全科目履修を通して、異文化と出会う。英語で開講されている科目は約 30%。</td></tr>
<tr><td>英語での専門教育</td><td colspan="12">31 のメージャーから選択して学ぶ。
英語で開講されている科目は約 20%</td></tr>
<tr><td>英語コミュニケーション力育成</td><td colspan="3">春・秋学期は週 9 コマ、
冬学期は週 8 コマの ELA
Academic Reading & Writing
Reading & Content Analysis
Academic Skills</td><td colspan="3">ELA
Research Writing
いずれかの学期に履修</td><td colspan="3"></td><td colspan="3"></td></tr>
<tr><td>海外プログラム</td><td colspan="3">フレッシュマン SEA プログラム</td><td colspan="3">ソフォモア SEA プログラム
夏期留学プログラム
国際サービス・ラーニング</td><td colspan="3">交換留学
夏期留学プログラム
国際サービス・ラーニング</td><td colspan="3">夏期留学プログラム
国際サービス・ラーニング</td></tr>
</table>

※　実践で囲まれた科目は必修科目、破線は選択科目（海外プログラム）である。

４．効果測定・アセスメント、カリキュラムマネジメント

全学，学部あるいは学科での DP や教育目標，あるいは海外プログラム個別の教育目標に対応させた形で，海外プログラムの成果を多面的に（複数のスキームを用いて）評価する仕組みがある

本プログラムの効果測定は、英語力については IELTS と英語 4 技能の伸びについての自己評価で測り、批判的思考力については RW でのリサーチ・ペーパーで測っている。IELTS については渡航前に受験した前年からの伸びを確認している。

IELTS の結果と英語 4 技能の伸びについての自己評価の結果、参加者アンケートの結果は派遣先大学ごとに比較して、派遣先大学の担当教員ともその結果を共有し、クラスの多様性、教員に対する評価、クラス構成の適切さなどについての回答結果なども踏まえて、次年度のプログラム改善に活かしている。

改善の最近の事例としては、提携先大学での実際の学修時間を精査し、それに合わせた妥当な単位付与を行えるよう変更し、2020 年度より本プログラムは計 6 単位の単位付与となる。

５．本プログラムに参加しやすくするためのサポートや工夫

プログラム設計が，特定のプログラム担当教職員だけでなく複数の教職員で共有され，かつその実施後に現地での活動状況や学修成果を鑑みてプログラムに修正を施し，次年度に引き継いでいける体制が学内外に明示的に確立されている

卒業必要単位として、2018 年度時点では計 4 単位（2020 年度より計 6 単位）を単位認定している。

RW を学修することには変わりないが、それ以外の異文化体験の部分については、派遣先大学によって特徴を打ち出せるように配慮している。例えば、ボランティアができる、アクティビティが充実しているなどである。

学内の春の留学説明会や 9 月の留学フェアなどで、他の海外プログラムと合わせて 1 年生への周知を図っていたり、参加した学生や担当職員から本プログラムについての話が聞ける個別の説明会を開催したりしている。

６．本プログラム参加者の他の海外プログラムへの参加

本プログラムは長期留学する学生の拡大に寄与している。例えば 2017 年度に本プログラムに参加した学生は 40 人であるが、2018 年度には 15 人の学生が交換留学を申し込んだ。ICU では例年 70-80 人の学生が交換留学に参加しているが、これに対する比率も 2 割と高い。

Ｂ．学生インタビュー

１．国際基督教大学学生１（教養学部アーツ・サイエンス学科言語学専攻３年）

（１）入学前の海外・異文化体験、海外プログラム参加に対する気持ち

高校３年生の秋からスペインへ１年留学をした。スペイン語ができる訳では無かったが、言葉がわからない英語圏以外の国で、自分がどれだけできるか試してみたかった。現地校での授業は、全く言葉がわからず、最初の頃は苦労したが、もともと他国の言語の発音をまねすることが好きだったので、自ら積極的に話すことで友人もできた。３～４ヶ月後には授業もわかるようになり、学校のテストも受けられた。留学終了後に再度日本の高校に通学したため高校卒業が１年遅れたが良い経験となった。

小学生の頃から自宅が留学生のホームステイを受け入れていたため、ミャンマー、フランス、カナダなど様々な国からの留学生とコミュニケーションするなど、異文化体験は身近な

ものだった。地域の国際交流団体の活動に参加していたことから、自身も海外でのホームステイ経験があり、小学３年生の時にはルクセンブルグ（母同行）、小学５年生でロシア、中学１年生ではカナダで１ヶ月のホームステイを経験している。その時のカナダのファミリーとは現在もＳＮＳで交流がある。また、高校１年の時に修学旅行でカナダに２週間滞在し、その際もホームステイを行っている。

大学入学時は、海外プログラムに必ず参加しようとは思わなかった。その理由は、高校で1 年間留学を経験できたことに加えて費用のことも考えた。また、国際基督教大学（以下、ICU）の場合、海外に出なくてもベストな環境が学内にあることも理由である。

（２）参加した海外プログラム

ソフォモア SEA プログラムに参加した。大学に入学してからは様々な授業科目を履修したいと考えて、寮の先輩などのアドバイスを参考にして３年生までの履修計画を考えた。その際、自分が学びたい分野の科目には、履修要件が多くあり、その履修要件となる授業科目と必修科目である Research Writing（以下、RW）の授業がことごとく重なるため、海外プログラムに参加して履修することを考えた。これまでアメリカには行ったことがなかったこともあり、また、本当は留学したいという気持ちがあったため、ソフォモア SEA プログラムへの参加を決めた。

派遣先はアメリカ・ウィスコンシン大学ミルウォーキー校で、渡米直後に受けたテストでレベル別にクラス編成された。クラスに応じて、リーディング、スピーキング、リスニングの授業を受け、その他、毎日２時間は ICU 生のための RW の論文作成の授業を受けた。RW 担当の先生は ICU 生一人ひとりのテーマに対して、トピックの確認、参考文献の紹介、文献の検索の仕方、パラグラフの適切なボリュームなどを丁寧に何度も指導をしてくれた。毎日２時間の授業内で少しずつ書き上げることができ、集中的に取り組めたので宿題として寮に持ち帰ることはなかった。

授業以外では、地域のサマーフェスでプラカードを持って道案内をするボランティアをしたり、また、多くのアクティビティも用意されていたため、授業のない日は、他国の学生と交流しながら野球観戦、ピクニック、カヤックなどを楽しんだりした。英語の授業担当の先生は、本当に良い先生でコミュニケーションを重視しており、地域で毎週金曜日に開かれる留学生が集まるホームパーティーを紹介してくれたり、シカゴに小旅行に連れて行ってくれたり、積極的に英語で話す機会を与えてくれた。

（３）事前・事後学習について

大学入学直後の１年間のリベラルアーツ英語プログラム（以下、ELA）が、事前学習になった。たくさんの論文を読み込み、同時に英語でエッセイも書いていたため、英語での文章の書き方や参考文献の扱い方をしっかりと学んでいた。そのため、ELA で学んだことをソフォモア SEA プログラムの RW に役立てることができた。事後学習は特になかったが、メ

ジャーである言語学のペーパーを英語で書く時に、RW で受けた指導を思い出すことも多い。さらに文章量も多く書けるようになったと思う。また、ソフォモア SEA プログラム参加メンバーや現地のパートナー学生との交流は現在も続いている。

（４）成長を感じる点

ウィスコンシン大学の英語授業担当の先生が良かったこともあり、語学力は向上した。また、これまでレポート提出は締め切り間際に書くなど計画性に課題があったが、RW は計画的に進めることができた。論文作成は個人で進める作業のため、書くか否かは自身にかかっていることもあり、自己管理能力がついたと思う。

（５）満足・不満足な点

英語学習 ELA の集大成となる論文を計画的に書き上げることができたことに満足している。海外プログラムで自分の論文を書くことに集中できたため、帰国した以降の授業はメジャー科目に集中できる。日本で RW を履修した人たちは、メジャー科目と平行して学習するほか、書くだけではなくプレゼンテーションもあるなど大変だったと聞いた。

また、英語で書く力は上がったが、現地では ICU 生同士で話す機会も多く、スピーキングなどアウトプットの機会が少なかったので、英語でのコミュニケーション力を伸ばすことが十分にできなかった。ただ、それはソフォモア SEA プログラムに参加する際の目的ではなかったため不満ではない。

（６）今後の学修

今後は海外プログラムに参加することは考えていない。今はメジャーである言語学の学修に ICU で取り組みたい。現在は卒業論文をどのように進めるか考えている。論文のテーマは決めているが、どのように分析するか、分析対象をどうするか等について、まだ決めかねている状態なので、しっかりと取り組んで良い論文を書きたいと考えている。

２．国際基督教大学学生２（教養学部２年）

（１）入学前の海外・異文化体験、海外プログラム参加に対する気持ち

両親ともに旅行が好きで、毎年のように海外旅行を楽しんでいた。旅行好きの両親であったが英語はあまり得意ではなく、中学生以降は自分が通訳をする機会が多かった。様々な国を訪問するたびに「もっと英語を話せるようになりたい」という思いと、旅行先での現地の方とのちょっとした会話が楽しく、大学生になったら必ず留学しようと考えていた。大学では単に語学の習得だけではなく国際関係も学びたいと考えていたことと、大学選択時から入学後の留学制度については色々と調べており、留学先の多さに加え、留学のタイプも豊富だったことなどから国際基督教大学（以下、ICU）を第一志望とした。大学１年次にも海外

留学プログラム（フレッシュマンSEA）はあったが、単位変換される授業が Academic Skills であり、比較的海外経験の少ない学生を対象としているプログラムであるということと、1年次には毎日語学に関する授業がある反面、2年次には英語の必修授業がなくなることから、よりレベルの高い Research Writing（以下、RW）が学べる２年次に留学をしようと考えていた。

（２）参加した海外プログラム

ソフォモア SEA プログラムに参加。留学先は、ウィスコンシン大学ミルウォーキー校とカナダのヴィクトリア大学とで最後まで悩んだが、キャンパスの美しさに惹かれヴィクトリア大学を選択した。最初の４週間は、午前中は全て英語の学習プログラムであり、最初にクラス分けテストが行われ５クラス中上から２番目のクラスとなった。参加する前は午前中の英語学習プログラムへの期待は高くなく、ICU での授業と大差ないだろうと思っていたが、実際にはとても革命的で楽しい授業だった。自分たちのクラスでは、アカデミックな内容のグラマーをきっちり学ぶことができるとともに、様々な会話も楽しむことができた。クラスは 15 人ほどで、半数が日本人であり、かつ ICU の学生が 6 人ほどと固まってしまったが、韓国やメキシコからの学生たちともとても仲良くなれ、韓国人の学生たちとは今でも連絡を取り合っている。後は週 2 回、ICU の学生だけを対象とした RW の授業が組まれ、RW の基礎を学んだ。それ以外の日は、Cultural Assistants（以下、CA）の学生たちが、海や動物公園でのピクニックなど、様々なアクティビティをプランニングしてくれており、大変楽しく過ごすことができた。

後半の 2 週間は午前午後共に RW の講義となる。テーマとして渡航前には「カナダの歴史と現在の外交」を考えていたが、RW という授業の内容を全く知らずに設定したテーマであったため、テーマが大きすぎるということから、現地の担当教員との話し合いで、設定テーマを掘り下げていき、最終的にはヴィクトリア大学がカナダ西端のブリティッシュコロンビア州にあることから、「ケベック州とブリティッシュコロンビア州の比較」をテーマとして設定した。RW の授業では実際にケベック州まで足を延ばすことが時間的に難しかったため、担当教員や CA としてサポートしてくれた学生、また図書館などで調べたり、カナダのローカルニュース番組から得た情報などから、英語圏とフランス語圏の文化の違い、移民の人数やカナダという国家に対する意識の違いなどをまとめた。2 週間で 2,000 語を書くなどということは今までは経験したことがなく、パラグラフ案や構成ドラフトを毎日作成し、翌日チェックを受けるなど、かなりハードな内容であったが、自分としてはとても英語力がついたと感じている。

寮生活では、大学のカフェテリアを朝昼夜と使えたことはとても良かった。当初あまり会話をしていなかった他国からの留学生たちとのコミュニケーションをとる場ともなったし、カフェテリアにテレビがあり、大好きなメジャーリーグの中継を見ることができた。

（３）事前・事後学習について

海外留学に対するオリエンテーションはあったが、ソフォモア SEA プログラムとしての事前研修はなかった。ただ、留学時に作成する RW のテーマについては、事前にいろいろと調べてから参加した。しかし、現地に入ってから大幅にトピックを変更したため、結果的には意味がなかった。大学 1 年時に履修していた英語プログラムそのものが、事前学習といえばそういえるものであった。また、事後学習についても「アンケート」以外には何もなかった。

（４）成長を感じる点

自宅からの通学生であるため、今回の留学を通して「自律」は身についたと思う。また、2 年次秋学期において、英語で開講され英語でレポートを提出しなければならない国際関係史を履修していたため、その授業においてはソフォモア SEA プログラムで教わった Writing Skills が大いに役に立った。「1 年間基礎を学び、6 週間の留学で身に着けたスキルを、実際に使い始めた！」という感覚となった。

（５）満足・不満足な点

今回参加したプログラムにおいては、すべてにおいて満足している。当初、同じクラスに日本人が多くいたことには驚いたが、結果的には多くの友人を作ることができ、不満な点とは言えない。あえて不満足な点を挙げるとすると、オリエンテーション資料に「寮での部屋割り」の記述があったが、その内容が実際とは異なっていたことと、フレッシュマン SEA でヴィクトリア大学にきていた 1 年生の学生寮が、ソフォモア SEA の学生寮とは新しさにおいてずいぶん落差があったため、かわいそうだなぁと思ったことぐらいか。

（６）今後の学修

ICU という空間で異文化体験を積んではいるが、実際に外国に住んでみないとわからないことがまだまだあると思い、3 年次 9 月から 1 年間イギリスに交換留学で行くことを決めている。最も勉強したい国際関係学の発祥がイギリスであることと、留学生にはあまり開放されていない法学が学べること、また、ICU にもないホスピタリティー（観光政策）の講座が開講されていることなどから、ヨークセントジョン大学への留学を決めた。ヨークという町はイングランド北部にあり、ロンドンとは異なり留学生もそれほど多くなく、じっくり腰を落ち着けて学ぶには最適な街と考えている。

将来は、国の機関や旅行・運輸などの企業において、「人」や「モノ」の国境を越えた移動にかかわる仕事に就きたいと漠然と思っており、1 年間の留学を通して、そのことも掘り下げることができればと考えている。

３. 国際基督教大学学生３（教養学部アーツサイエンス学科言語教育学・教育学専攻予定２年）

（１）入学前の海外・異文化体験、海外プログラム参加に対する気持ち

海外体験としては家族での 3 回のアメリカ旅行の他に、高校生でオーストラリアの短期語学研修にホームステイで行った。また、中学生の時には姉妹都市交流でアメリカの生徒が 1 週間ほど私の中学校に来て交流した。この時の生徒やオーストラリアのホームステイ先とは今でもメールや SNS でつながっている。

ICU 入学前は、長期留学ではなく何らかの中・短期の海外研修に行こうと考えていた。理由は、学部の時に留学しても語学の面で苦労するのではないかと考えたから。学部の間は ICU でしっかり学んでから、海外の大学院に進学するとか、大学院の時に長期留学をする方がよいのではと思った。

2 年次の「Research Writing（以下、RW）」は ICU 学内の授業としても受けられるが、海外の「ソフォモア SEA プログラム」を選んだ理由は、将来は英語教育を専攻したいので向こうで英語を教えている人から指導してもらいたいと思ったから。また 1 年生の「フレッシュマン SEA プログラム」に参加した友人が、イギリスでパキスタンの学生と交流して面白かったと語っていたのも影響し、異文化に触れたいとも思った。行先としてカナダ・ヴィクトリア大学を選んだのは、カナダでの外国語教育と日本の英語教育の比較をしたいという思いがあったから。

（２）参加した海外プログラム

派遣期間 6 週間のうち最初の 4 週間はヴィクトリア大学の既存のプログラムで、韓国や台湾、メキシコの学生と一緒に英語を学んだ。クラス分けがあり 1 クラス 15 人程度の中に ICU 学生は 4 人くらい。授業は午前中で午後にアクティビティがある。アクティビティではいろいろなところにクラス単位で行ったり、ゲームをしたりした。ヴィクトリア大学の学生がクラスに 1 人付いてくれた。これらが終わるのが夕方 3 時～4 時ごろで、その後クラスの他国の友人と学外に遊びに行くことが多かった。この 4 週間の内でも、平日の午後 2 回 RW の授業があり、エッセイをどう書くか考えたり実際に書き進めたりした。

既存プログラム 4 週間の終わりにはスピーキングとディスカッションのテストがあった。ディスカッションを 3 人の学生でやって先生が評価する。プレゼンのテストもあり、先生が用意したトピックの中から選んで行った。プレゼンスキルがメインだった。

最後の 2 週間は、午前 3 時間と午後 4 時間みっちり RW の授業を受けた。3 日目に第一稿を提出したが、これは既存プログラムを受けている 4 週間の間に書いたもの。この時点で語数は足りてなくてもいい。これ以降の授業時間でライティングに必要な知識を教わり、説得力のあるエッセイの書き方の練習をした。実際に自分のライティングに取り組むのは授業後で、毎日 16 時まで授業があって、その後 1 時間くらい取り組んだ。リサーチでは、日本では資料の少ないカナダの学校制度について調べた。特に英語・フランス語のイマージョン教育について。それから、英語が母語でない人へのカナダにおけるバックアップシステ

ムについても。これらはネットや図書館で文献調査をした。

最終的に 2000 語、A4 用紙 5 枚くらいのエッセイを仕上げたが、途中の個別指導では自分がどこを見てほしいかを先生に言って見てもらう。とりあえず見てください、ではなく、そこを考えて指導を仰ぐというのが、今でも役に立っている。

（３）事前・事後学習について

事前学習については、ヴィクトリア大学から何をテーマに書きたいのかというメールが送られてきた。アウトラインを自分なりに書いていったら、どういうデータを使って証明するかまで求められ、書き直すように指導された。英語的な準備は特にせず、英語開講の授業を１科目履修しただけだった。

事後学習としては特になかったが、自分としては帰国後のレポート執筆に役立っている。日本語か英語かに関係なく、書いた内容が理論と結びついているかを点検する習慣が身についた。

（４）成長を感じる点

専攻は言語教育にしたいと思っているが、カナダで調べる過程で、このテーマも時事的政治的な要素が絡んでくると知った。そういうことを知るのがリベラルアーツであり、だからこそ幅広く履修したいと思うようになった。また韓国の学生との交流も多くしたが、それ以前に自分が持っていた日韓関係の悪さについてのステレオタイプ的な感覚が変わり、もっと広く考えられるようになった。

RW を指導してくれたのが PhD を目指している 30 代の女性だったが、その姿勢が衝撃的でロールモデルになったし、自分も研究を続けたいと思うようになった。

（５）満足・不満足な点

満足しているのは多くの経験ができたこと、少人数なので先生から多くのフィードバックを受けられたこと。

満足できなかったことは、時間が足りなかったこと。ICU で RW を受講すると 10 週間の期間があり、その中でアンケートやインタビューもあるが、それができなかったこと。

（６）今後の学修

長期留学は何らかの形でしたいと、より強く思うようになった。専門がしっかり学べるようになってから留学したいので、海外の大学院進学も選択肢にしている。